

【共同研究】

## 価値観・労働観・ライフスタイル等に関する 日本と北欧の比較調査研究 第1次報告

大塚 明子\* 秋山美栄子\*\* 森 恭子\*\*\* 星野 晴彦\*\*\*\*

### Comparative Study of Values, Work Ethics, and Lifestyles in Japan and Sweden: An Initial Report

Meiko OTSUKA, Mieko AKIYAMA, Kyoko MORI, Haruhiko HOSHINO

One project marking the 30th anniversary of the Faculty of Human Sciences was a comparative study of Japan and Sweden through three years of surveys from 2008 through 2010. Respondents were given a questionnaire with various questions on values and lifestyle plus five psychological scales: Normative Attitude toward Helping (Hakoi, Takagi [1987]), QOL (Quality of Life, WHO), Independent and Interdependent Self-Concept (Shortened version) (Takata [2000]), Self-esteem (Rosenberg [1965]), and Interpersonal Reliance (Horie, Tsuchiya [1995]). In both Sweden and Japan, 3 populations were surveyed: college students, teachers, and welfare personnel.

These notes are an initial report describing the design and methods of the research, characteristics of survey respondents, and a summary of the survey's results.

**Key words** : Sweden, comparative study, Interpersonal Reliance, Normative Attitude toward Helping, Independent and Interdependent Self-Concept

スウェーデン、比較調査、対人信頼感、援助規範意識、文化的自己観

1. はじめに
2. 調査の設計と方法
3. 対象者のプロフィール
4. 5つの心理尺度
5. 従属変数

### 1. はじめに

人間科学部では1991年度から、2月に約10日間の北欧諸国への研修旅行を行っており、既に通算20年近くになる。主な訪問先はフィンランドとス

ウェーデンの様々な福祉施設や学校などで、数回はノルウェーも含まれた。この間、現地としっかりしたパイプを築くとともに、引率者として参加した教員も、北欧諸国に関する見聞や勉強を重ねている。この貴重な蓄積を生かし、大塚・秋山・星野・森の4名は、人間科学部の30周年記念プロジェクトの一環として、2008～10年度の3年間にわたり、質問紙調査を核とした日本とスウェーデンの比較研究を行うこととした。

4名の学問的な背景は社会学・福祉学・心理学と異なるが、人々の人権意識・異文化への寛容・他者や社会への信頼・家族のあり方や高齢者への視線などに関する日本と北欧の違いについて、問題関心を共有している。北欧に関するこれまでの先行研究は、福祉や教育などの特定領域に焦点を当てたものが多い。本研究は、参加者が異なった

---

\* おおつか めいこ 文教大学人間科学部人間科学科  
\*\* あきやま みえこ 文教大学人間科学部心理学科  
\*\*\* もり きょうこ 文教大学人間科学部人間科学科  
\*\*\*\* ほしの はるひこ 文教大学人間科学部人間科学科

専門をもつ利点を生かし、価値観・労働観・ライフスタイルといったより広い視点から質問紙を構成することとした。総合的な人間学を目指す人間科学の趣旨に相応しいプロジェクトといえるのではないかと自負している。

詳細は後述するが、初年度は主として質問紙の検討・作成を行い、2・3年目にスウェーデンおよび日本で大学生・教員・福祉職員の3グループに調査を実施、総計644名の回答を回収した。結果は、4名の参加者がそれぞれ最も関心をもつテーマに焦点を当てて分析・草稿を執筆し、全員で検討したうえで修正し、共著論文として完成。その後、各テーマに適した学会で発表し、対応する学術雑誌に投稿する予定である（北ヨーロッパ学会『北ヨーロッパ研究』など）。最終的には共著にまめたいと考えている。

ただ各テーマに特化した個々の学術論文では、この3年間の共同研究プロジェクトの全体像を記述することが難しい。そこで本稿は研究ノートの形で、調査の設計と方法・対象者のプロフィール・結果の概略を述べ、第1次報告とさせていただく。

## 2. 調査の設計と方法

まず初年度は、先行研究のレビューを行いつつ、4名の参加者の個別的な関心も可能な限り組み込むよう、討論を重ねて調査票を作成。2009年秋に国内で教員91名を対象に予備調査を行い、再検討の後に確定した。結果としてⅠ～Ⅶの7設問群、大別すると5つの心理尺度（Ⅰ・Ⅲ～Ⅵ）+従属変数として想定した独立する諸設問（Ⅱ）+フェースシート（Ⅶ）の3部構成とし、計117問となった。採用した心理尺度は、援助規範意識（箱井・高木[1987]）・QOL（Quality of Life, WHO）・相互独立的一相互協調的自己観の短縮版（高田[2000]）・自尊感情（Rosenberg[1965]）・対人信頼感（堀井・樋谷[1995]）である。独立した設問としては、ワーク・ライフ・バランスや高齢者観、移民や多文化主義に対する見方が主なものである。

設問の確定後、まず日本語から英語へ、次に英語からスウェーデン語に翻訳した。英語からスウェーデン語に訳す際、ストックホルム在住の

日本人協力者に、日本語の原文とも比べて同一の意味内容となるよう精査していただいた。予算の制約上、スウェーデン語を日本語に再訳してチェックする過程は省略せざるをえなかったが、主な心理尺度は両国ともに満足しうる信頼性を示しており（後述）、設問の同一性はほぼ確保できたと考える。

調査方法としては、様々な制約から無作為抽出の実施が困難なため、一定の条件を共有すると思われる複数のグループを比較することとした。調査票の配布・回収のしやすさを考慮して、具体的には、大学生・中高の教員・福祉施設の職員という3グループを設定。各100名、日本とスウェーデンで総計600名程を目指す。

まず2010年3月、参加者のうち3名（大塚・秋山・森）が、現地コーディネーターの協力のもと、ストックホルムとその周辺で質問紙の配布と回収を行った。大学生は教室を訪問しその場で記入、教員と福祉職員は留置法で、ともに一部のみ後日郵送していただいた<sup>1)</sup>。結果として計289名の回答を得ることができた。次に6～7月に日本分の調査を実施。対象は本学部の学生と、本大学の研修に参加した教員<sup>2)</sup>、越谷市周辺の高齢者施設の職員で、計376名となった。日本のほうが87人多いが、概ね釣り合う数で十分な回答数がえられたのではないかと考えている。

心理尺度を利用した国際的な比較研究はこれまで数多くなされてきた。だが、ほとんどは大学生に対する調査に基づいており、当該社会や文化に対する代表性という点では疑問の余地がある（Oyserman他[2002]）。本調査は、成人の2グループを対象とし、幅広い年齢・社会層をカバーしているため、より一般性の高い結果が期待できると思われる。また日本と他国のインテンシブな2国間研究は、従来アメリカとの比較が圧倒的に多かった。日本とスウェーデンの価値観に関する質問紙調査は、管見の限り少ないようで、その意味でも貴重なデータといえるのではないかと。

## 3. 対象者のプロフィール

まず問Ⅶのフェースシートから、対象者のプロ

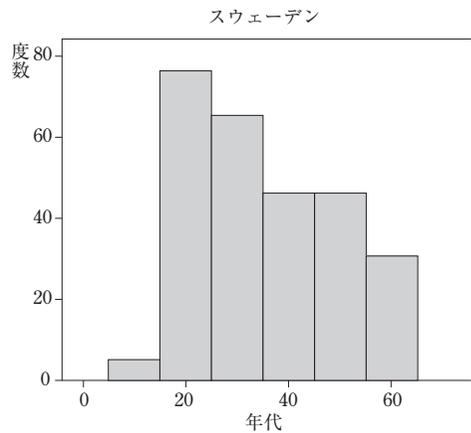
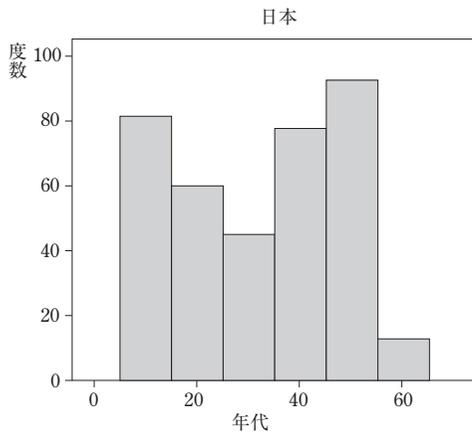
フィールを概観しておく<sup>3)</sup>。グループ別の回答数は、スウェーデンが大学生122・教員107・福祉職員60（ほぼ4強：4弱：2）、日本が大学生129・教員163・福祉職員84（ほぼ4弱・4強・2）である。

両国とも総計では性比をほぼ男3：女7で揃えることができた（表1）。日本側はグループ間にも著しい違いがない。だが、スウェーデンのほうは教員がほぼ同数でバランスがよいのに対し、福祉職員の9割を女性が占めている。

平均年齢は日本36.5才（SD15.9）・スウェーデン39.1才（同14.0）だが、年代構成はかなり異なる（グラフ1）。日本は10代および40～50代の両端が、逆にスウェーデンは20～30代の中間層が多い。

表1 国・グループ別の性比

		男性	女性	合計
日本	学生	34(26.4%)	95(73.6%)	129(100.0%)
	教員	52(32.1%)	110(67.9%)	162(100.0%)
	福祉	17(20.2%)	67(79.8%)	84(100.0%)
	合計	103(27.5%)	272(72.5%)	375(100.0%)
SW	学生	33(27.5%)	87(72.5%)	120(100.0%)
	教員	49(47.1%)	55(52.9%)	104(100.0%)
	福祉	6(10.2%)	53(89.8%)	59(100.0%)
	合計	88(31.1%)	195(68.9%)	283(100.0%)



グラフ1 年代のヒストグラム

グループ別の年代構成を以下に示す（表2）。成人2グループの平均年齢は両国とも40代後半で有意差がないが（日本45.5才・スウェーデン47.6才）、学生では約10才の大きな差がある（日19.6才・SW28.3才）。この違いは、北欧諸国では兵役等で

高校卒業後すぐ大学に進学しない者が多く、またいったん就職してから学業に戻る例もよくみられることによるものであろう<sup>4)</sup>。日本とは大学の社会的位置づけ自体が大きく異なるため、大学生グループを比較する場合は注意が必要となる。

表2 国・グループ別の年代構成

		10代	20代	30代	40代	50代	60代	合計
日本	学生	77 (59.7%)	52 (40.3%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	129 (100.0%)
	教員	0 (0.0%)	0 (0.0%)	37 (23.0%)	48 (29.8%)	76 (47.2%)	0 (0.0%)	161 (100.0%)
	福祉	5 (6.0%)	9 (10.8%)	9 (10.8%)	30 (36.1%)	17 (20.5%)	13 (15.7%)	83 (100.0%)
	合計	82 (22.0%)	61 (16.4%)	46 (12.3%)	78 (20.9%)	93 (24.9%)	13 (3.5%)	373 (100.0%)

SW	学生	5 (4.2%)	67 (56.3%)	35 (29.4%)	12 (10.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)	119 (100.0%)
	教員	0 (0.0%)	5 (5.2%)	25 (25.8%)	18 (18.6%)	27 (27.8%)	22 (22.7%)	97 (100.0%)
	福祉	0 (0.0%)	5 (9.1%)	6 (10.9%)	16 (29.1%)	19 (34.5%)	9 (16.4%)	55 (100.0%)
	合計	5 (1.8%)	77 (28.4%)	66 (24.4%)	46 (17.0%)	46 (17.0%)	31 (11.4%)	271 (100.0%)

以上の年代構成の違いを反映して、日本はパートナーと同居が半数（既婚49.6%＋同棲0.5%＝50.1%）、スウェーデンは63.1%（既婚34.9%＋同

棲28.2%）と差があった（表3）。また子供のいる人は、日本48.4%・スウェーデン57.9%であった。

表3 婚姻状況

	既婚	同棲	離婚・死別	未婚	分からない	計
日本	186 (49.6%)	2 (0.5%)	20 (5.3%)	166 (44.3%)	1 (0.3%)	375 (100.0%)
スウェーデン	99 (34.9%)	80 (28.2%)	33 (11.6%)	72 (25.4%)	0 (0.0%)	284 (100.0%)
計	285 (43.2%)	82 (12.4%)	53 (8.0%)	238 (36.1%)	1 (0.2%)	659 (100.0%)

スウェーデンの対象者は、全体の約1割が外国生まれだった（表4）。特に福祉で2割に達し、教員では少ない。なお日本では、福祉職員のみ4.8%の外国出身者がいた（全体では1.1%）。

表4 スウェーデン対象者の出生地

	スウェーデン	その他	計
学生	107 (89.2%)	13 (10.8%)	120 (100.0%)
教員	93 (94.9%)	5 (5.1%)	98 (100.0%)
福祉	46 (79.3%)	12 (20.7%)	58 (100.0%)
計	246 (89.1%)	30 (10.9%)	276 (100.0%)

## 4. 5つの心理尺度

### (1) 5つの心理尺度と信頼性

2. でふれた通り、我々の調査票は5つの心理尺度を用いている。それらを導入した意図と、それぞれの内容について概略を述べたい。

まず、参加者4名が共有する大きな問題関心として、「北欧諸国の高福祉国家を支えるものは何か？」という問いがある。この問題との強い関連が推測される社会的・文化的要因として、一般的な他者への信頼感や、「人を助けること」に関する価値観や意識がある。そこで、先行研究との比較可能性などを考慮し、対人信頼感尺度（堀井・榎谷 [1995]）および援助規範意識尺度（箱井・高木 [1987]）を採用することとした。

ところでスウェーデンは、強い「連帯・コミュニティ・仲間意識（fellowship）・協力・一体性」（Telhaug他 [2004: 143]）に基づく高福祉国家を築き上げてきた一方で、「もっとも複雑で極限の

近代的自我をもつ「孤絶した個人」からなる、個人主義の社会だともいわれる（武田 [1995: 91, 105]）。

これに対し、日本の「和」の文化は、長く集団主義の典型として論じられてきた。だが、近年、こうした伝統的な見方に異を唱える研究も目立つ。その代表ともいえる社会心理学の山岸(2008)は、日本人がアメリカ人よりも実験で非協力的行動を選好する傾向が強い「個人主義者」であり、それは他者一般への信頼の低さと関連するのではないかと述べている (93-95)。

以上の簡単なスケッチからも分かるように、個人主義/集団主義という重要な対概念は、論者によって異なる曖昧なイメージで使用されており、標準的な尺度が確立していない。本調査では、相互独立的/相互協調的自己観尺度（短縮版）（高田 [2000]）を使用した。これはMarkus & Kitayama (1991) が示した2つの文化的自己観（cultural view of self）が、個人においてどの程度内面化されているかを測定するために考案されたものである。高田自身が述べる通り、文化的自己観の2類型は、個人主義/集団主義の差異と完全に一致するものではない。しかし、この2組の対概念が従来かなり重なるものとして扱われてきたこと、高田尺度が総計約2万人という豊富な実績を有することから、採用することとした。

さらに国際的に広く使用されているローゼンバーグの自尊感情尺度（Rosenberg [1965]）を加えて、信頼・援助に関する意識や個人主義/集団主義との関連を検討したい。

やはり世界標準的な尺度であるQOL（Quality of Life, WHO）は、「身体」「心理」「社会」「環境」の4つの下位領域を含む。これは生活の物質的な側面も含むため、本研究では主に独立変数として分析を行うこととする。

国ごとにみた5つの心理尺度の信頼性は次の通りである（表5）。

援助規範意識と文化的自己観は、 $\alpha$ 係数の目安とされる0.8を下回る結果となった。この2尺度については、なぜ信頼度が低くなったかの考察や新たな下位因子の設定も含めて、今後個別の論文で深く分析を行うこととする（文化的自己観は大塚

表5 心理尺度の信頼性（Cronbachの $\alpha$ 係数）

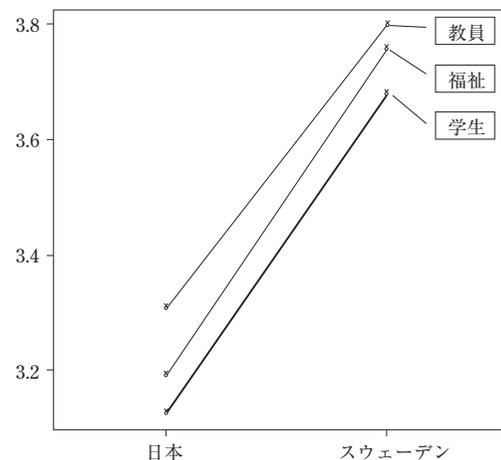
尺度名* ( ) は項目数	日本	SW
I. 援助規範意識 (29)	.797	.697
III. QOL (26)	.907	.869
IV. 相互独立的自己観 (4)	.677	.578
相互協調的自己観 (6)	.696	.619
V. 自尊感情 (10)	.895	.812
VI. 対人信頼感 (17)	.849	.892

が、援助規範意識は星野が主に担当する)。

本稿では、信頼性に問題のないQOL・自尊感情・対人信頼感の3尺度について、結果の概略を述べる。

## (2) QOL (Quality of Life)

既述の通り、QOL尺度は26問で、「身体」「心理」「社会」「環境」の4つの下位領域を含む（全て5段階回答で、逆転項目の処理後に平均値を算出）。まず全体平均をみると、日本3.2<スウェーデン3.7で有意差があった ( $p<.001$ )。国別の分散分析では、スウェーデンのグループ間に差が検出されず、日本の学生と教員の間のみ有意差があった（グラフ2）。



グラフ2 QOLの平均値（国およびグループ別）

4つの下位領域の全てでスウェーデンのほうが有意に高いので、設問ごとに細かくみてみよう。有意差 ( $p<.05$ ) がなかった項目は26問中4問の

みだが、その1つが「必要なものが買えるだけのお金を持っていますか」である。従って、1人当り名目GDP(米ドル換算)ではスウェーデンのほうが多少高いが<sup>5)</sup>、この経済条件はQOLの全体的な差にほとんど影響を与えていないと考えられる。もう1つは「毎日の生活をどのくらい楽しく過ごしていますか」<sup>6)</sup>。他の指標が総じて低いにも、この設問に差がないということは、日本人の生活の質に対する主観的な期待度が相対的に低いということではないだろうか。

逆に、差が1前後と大きかった5問を順に並べると(( )内はスウェーデンー日本) :

- 1 「自分の仕事をする能力に満足していますか (Are you satisfied with your own ability to work?)」 (1.08)
- 2 「自分の生活の質をどのように評価しますか (How do you evaluate your quality of life?)」 (1.06)
- 3 「自分自身に満足していますか (Are you satisfied with yourself?)」 (0.97)
- 4 「医療施設や福祉サービスの利用しやすさに満足していますか (Are you satisfied with an easy access to medical facilities or welfare services?)」 (0.88)
- 5 「自分の容姿(外見)を受け入れることができますか (Can you accept your looks (appearance)?)」 (0.82)

である。このうち4は福祉制度と直接関連する設問で、スウェーデンが高福祉国家であることがやはり国民のQOLを高めているといえよう。また1・3・5は自尊感情と重なる設問で、実際この尺度とQOLとの相関はかなり高い (.67)。

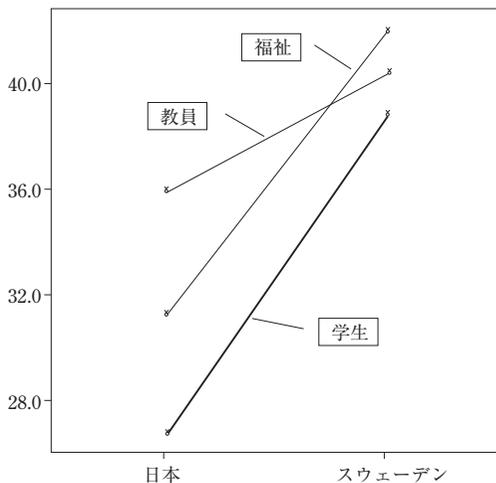
### (3) 自尊感情 (self esteem)

この尺度(全10問・5段階で、逆転項目の処理後に合計値を算出)を用いた先行研究は、国際的にみた日本人の自尊感情の低さという点で一致している。例えば、日本人1657名・カナダ人1402名の大学生を対象としたHeineの調査では(1999)、平均値で前者31.1<後者39.6と大差があった(高田[2004]より引用)。また日本・スウェーデン・アメリカ・中国の14~15才を対象とした河地

(2003)も、日本の中3生の「自信力」が最下位、かつ1国だけ著しく低いことを問題とした(1位はスウェーデンだが、他の2国と顕著な差はない)<sup>7)</sup>。

他の類似尺度や設問を用いた国際比較でも、日本人の自己肯定感は軒並み低く出ている(Diener & Diener [1995] 他)<sup>8)</sup>。日本人は西欧文化の人々に比べ自己卑下ないし自己批判的という結論(高田[2004:140])は、強く支持されるようだ。

本調査でもこうした傾向が再確認された。自尊感情の全体の平均値は日本31.6<スウェーデン40.3と差が大きく、もちろん有意である( $p < .001$ )。グループで高い順に並べると、日本は教員35.8>福祉31.3>学生26.7、スウェーデンは福祉42.2>教員40.5>学生39.1。国別の分散分析はどちらも有意で、日本では3グループ間全て( $p < .001$ )、スウェーデンでは福祉職員と学生の間差があった( $p < .01$ ) (グラフ3)。



グラフ3 自尊感情の平均値(国およびグループ別)

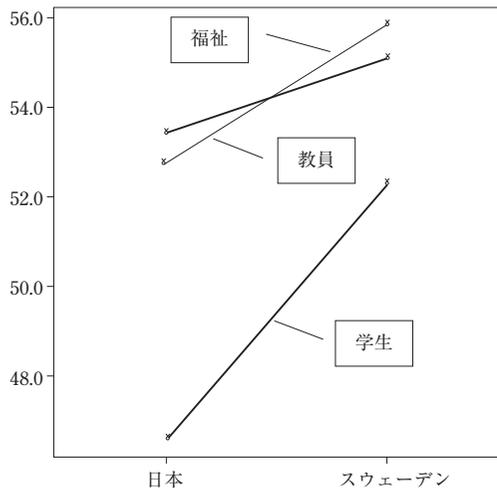
既述したHeine(1999)と本調査の大学生を比較すると、カナダ人39.6に対しスウェーデン人39.1と、ほぼ等しい。だが、日本人は、Heine調査の31.1に対し、26.7とかなり大きな差がある。これにはいくつか解釈がありうるが、文化的自己観をテーマとする論文でまとめて論じる予定である。

#### (4) 対人信頼感

他者・共同体・国家などに対する「信頼」は、重要な社会関係資本 (social capital) の1つとして近年注目を集めている (Fukuyama [1995 = 1996]・キサラ他編 [2007] など)。

先行調査をみると、世界価値観調査に、「人はだいたいにおいて信用できる」「人と付き合うには用心するにこしたことはない」(+「わからない」)のいずれかを選択させる設問がある。2005～06年版では、日本の信用派36.6%・用心派57.0%に対し、スウェーデンは信用派65.3%・用心派30.7%で、信用度で25カ国中1位だ(電通総研日本リサーチセンター編 [2008])。両国の数字は2000年調査でもほぼ変わらない。朝日新聞の調査(2008)でも、「いまの世の中」は「信用できる人が多い」24%に対し、「信用できない人が多い」64%となっている(2008/3/21付)。

本調査で用いた対人信頼感尺度(全17問・5段階、逆転項目の処理後に合計値を算出)でも、全体の平均値は日本50.8<スウェーデン54.1で有意差があり ( $p<.001$ )、先行調査と一致する傾向が確認された。



グラフ4 対人信頼感の平均値(国およびグループ別)

グループで高い順に並べると、日本は教員53.4>福祉52.7>学生46.6、スウェーデンは福祉55.8>教員55.1>学生52.3。国別にグループごとの分散分析をおこなうと、スウェーデンでは有意

差がなかったが、日本では学生のみ他より低かった ( $p<.001$ )。

\*

以上で、我々の比較調査で用いた5つの心理尺度のうち、3つの概略的な結果を記述した。これら相互の関係、および他の文化的自己観と援助規範意識との関連については、今後の個別論文でより深く分析・考察することとする。

## 5. 従属変数

従属変数として想定した設問群Ⅱ(19問)は、さらにいくつかの下位テーマに分けられる。ワーク・ライフ・バランス、家族観(特に老親と子の関係)と老年期観、移民観、その他である。ここでは小テーマごとに結果の概略を記述する。

### (1) 孤立した設問

初めに1問のみの孤立した設問についてみる。

西洋の個人主義の基盤にはキリスト教の信仰があるとよくいわれる(例えば河合 [1997: 289])。こうした見解と照らし合わせるため、宗教観に関する設問を入れた。もっともスウェーデンは、日本と並んで、どんな比較調査においても一貫して低い宗教性を示す国の1つである(石井 [1997: 78])<sup>9)</sup>。ルター派の国教会に国民の約95%が所属し、新生児の8割が洗礼を受けるが、日曜礼拝に参加するのは3%にすぎない(大岡 [2004: 146-47, 222])。

本調査も先行研究を追認する結果となった。Ⅱの19問のうちt検定ないし $\chi^2$ 検定で有意差が出なかったのは3つだけだが、その1つだったのである(表6)。

次に、文化的自己観や自尊感情と照合するために、内閣府の世界青年意識調査にある「自分らしさ」に関する設問を取り入れた(表7)。

「わからない」を除外して肯定派と否定派に分けると、意外なことに日本のほうが「自分らしさを貫くこと」に肯定的という結果になった。

もう1つ、個人主義や社会的信頼との関連が想定される設問として、世界価値観調査から国家と個人の責任に関する問いを取り入れた。1を完全

表6 5. 宗教観（宗教や信仰の世界は、自分とは無縁だ」という考えは、あなたにあてはまりますか（Does such notion as “I have nothing to do with religion or faith” apply to you?）

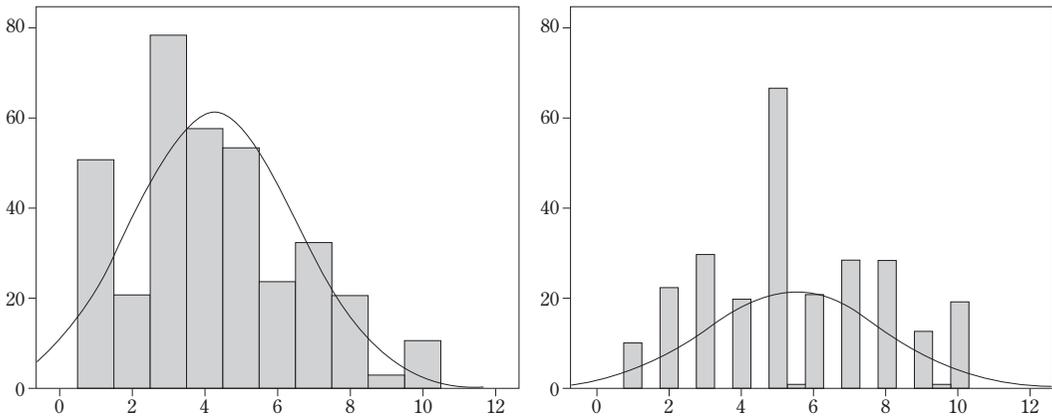
	あてはまる	ややあてはまる	どちらともいえない	ややあてはまらない	あてはまらない	計
日本	111 (29.6%)	85 (22.7%)	79 (21.1%)	62 (16.5%)	38 (10.1%)	375 (100.0%)
SW	61 (21.4%)	63 (22.1%)	51 (17.9%)	47 (16.5%)	63 (22.1%)	285 (100.0%)
計	172 (26.1%)	148 (22.4%)	130 (19.7%)	109 (16.5%)	101 (15.3%)	660 (100.0%)

表7 6. 自分らしさ（あなたは、どんな場面でも自分らしさを貫くことが大切だと思いますか（Do you think it important to express your individuality under any circumstances?）

	わからない	そう思わない	あまりそう思わない	まあそう思う	そう思う	計
日本	8 (2.1%)	33 (8.8%)	106 (28.3%)	176 (46.9%)	52 (13.9%)	375 (100.0%)
SW	30 (10.5%)	110 (38.6%)	23 (8.1%)	65 (22.8%)	57 (20.0%)	285 (100.0%)
計	38 (5.8%)	143 (21.7%)	129 (19.5%)	241 (36.5%)	109 (16.5%)	660 (100.0%)

な国家責任派（国民皆が安心して暮らせるよう国はもっと責任をもつべきだ（The state should be more responsible for the society so that citizens can live in peace.））、10を完全な個人責任派（自分のことは自分で面倒を見るよう個人がもっと責任をもつべきだ（Individual citizens should be

more responsible for taking care of themselves.））とした場合、意見がどのあたりに位置するかを数字で訊ねる設問である。平均は日本4.3<スウェーデン5.5と明確な差があり（ $p < .001$ で有意）、前者のほうが国家責任派、後者のほうが個人責任派という結果になった（グラフ5）。



グラフ5 国家責任派か個人責任派か

これらの設問が、対人信頼感や援助規範意識その他の心理尺度とどう関連するかについては、個別論文でさらに検討する。

(2) ワーク・ライフ・バランス

QOLとの強い関連が想定されるワーク・ライ

フ・バランスについては、NHK「現代日本人の意識構造」調査と比較できるよう、意見と現状に関して同じ設問を取り入れた（表8・9）。いずれも極めて顕著な差がみられ、スウェーデンのほうが明確にライフ優先となっている。

表8 1. ワーク・ライフ・バランスに関する意見

	ライフ優先	できるだけ ライフ重視	ワークもラ イフと同等	ワーク優先	計
日本	27 (7.2%)	88 (23.5%)	211 (56.3%)	49 (13.1%)	375 (100.0%)
SW	115 (40.8%)	72 (25.5%)	92 (32.6%)	3 (1.1%)	282 (100.0%)
計	142 (21.6%)	160 (24.4%)	303 (46.1%)	52 (7.9%)	657 (100.0%)

表9 ワーク・ライフ・バランスの現状\*学生は除外

	ライフ優先	できるだけ ライフ重視	ワークもラ イフと同等	ワーク優先	計
日本	13 (5.3%)	27 (11.0%)	106 (43.3%)	99 (40.4%)	245 (100.0%)
SW	69 (43.7%)	31 (19.6%)	57 (36.1%)	1 (0.6%)	158 (100.0%)
計	82 (20.3%)	58 (14.4%)	163 (40.4%)	100 (24.8%)	403 (100.0%)

(3) 家族観と老年期観

特定の社会における家族のあり方と、そこで採用される福祉制度は、根底において深い関連があると思われる。そこで家族に関わる現状と意見(特に老親と子の関係)に関する5問を設定した。

まず現在の家族関係について。7. 「あなたは、

あなたの家族と深く心が通じ合っていると思いますか (Do you think you relate to your family members?)」という問いに対しては、日本よりはるかに離婚率が高いスウェーデンの回答者のほうが、明確に肯定的である(表10)。

表10 7. 家族と心のつながり

	わからない	そう 思わない	あまりそう 思わない	まあ そう思う	そう思う	計
日本	13 (3.5%)	18 (4.8%)	49 (13.1%)	201 (53.6%)	94 (25.1%)	375 (100.0%)
SW	15 (5.2%)	15 (5.2%)	5 (1.7%)	19 (6.6%)	232 (81.1%)	286 (100.0%)
計	28 (4.2%)	33 (5.0%)	54 (8.2%)	220 (33.3%)	326 (49.3%)	661 (100.0%)

次に家族に関する意見をみよう。有意差がなかった2問は、8. 「『子どもは親から経済的に早く独立するべきだ』という考え方についてどう思いますか (What do you think of the idea of “Children should economically be independent from their parents as soon as possible?”)」と、9. 「自分の子どもに老後の面倒をみてもらいたいと思いますか

(Do you want to be looked after by your children in your old age?)」(表11・12)。前者に関しては7～8割の圧倒的多数が肯定派で、後者については6～7割が否定派である。日本人もスウェーデン人も、親世代と子世代が互いに自立することを理想としているといえよう。

表11 8. 子供は早く経済的に独立すべき

	わからない	そう 思わない	あまりそう 思わない	まあ そう思う	そう思う	計
日本	22 (5.9%)	17 (4.5%)	33 (8.8%)	222 (59.2%)	81 (21.6%)	375 (100.0%)
SW	15 (5.3%)	43 (15.1%)	48 (16.9%)	108 (38.0%)	70 (24.6%)	284 (100.0%)
計	37 (5.6%)	60 (9.1%)	81 (12.3%)	330 (50.1%)	151 (22.9%)	659 (100.0%)

表12 9. 子供に老後の面倒を期待する

	わからない	そう 思わない	あまりそう 思わない	まあ そう思う	そう思う	計
日本	54 (14.4%)	118 (31.4%)	102 (27.1%)	87 (23.1%)	15 (4.0%)	376 (100.0%)
SW	36 (12.8%)	101 (35.9%)	68 (24.2%)	54 (19.2%)	22 (7.8%)	281 (100.0%)
計	90 (13.7%)	219 (33.3%)	170 (25.9%)	141 (21.5%)	37 (5.6%)	657 (100.0%)

他は有意差がみられた。世界価値観調査から導入した「親の子供に対する責任度」は、「親は子どもに最良のことでしてやるべきであって、それによって自分たちの幸せが子どもの犠牲になってもやむをえない (Parents should do best for their children even at the sacrifice of their happiness.)」「親には親の人生がある、親は子どものために自

分たちの幸せを犠牲にすべきではない (Parents have their own lives. They should not sacrifice their happiness for their children.)」「どちらでもない (No opinion.)」の3択である (表13)。これは日本が自分の幸福派・スウェーデンが犠牲派という傾向であった。

表13 11. 親の子供に対する責任度

	親は子供のために 犠牲もやむをえない	親も自分自身の 幸福を追求すべき	どちらでもない	計
日本	146 (38.9%)	113 (30.1%)	116 (30.9%)	375 (100.0%)
SW	160 (57.8%)	77 (27.8%)	40 (14.4%)	277 (100.0%)
合計	306 (46.9%)	190 (29.1%)	156 (23.9%)	652 (100.0%)

「年老いた親の扶養」に関しては、日本の回答者の約7割が「自分の生活力に応じて養う (It is up to your ability to earn your lives.)」に集中している (表14)。これは世界青年意識調査の継続設問だが、最新2008年度における日本人青年の回答 (5か国中最高) とほぼ一致している。これに対し、新自由主義の本場である英米の若者は、約65%が

「どんなことをしてでも親を養う (You will support your parents at all costs.)」と答えていた。本調査のスウェーデン人回答者は、その中間に入るといえる。他の問いと比べて「わからない (You don't know.)」が多いのも特徴で、高福祉国家では具体的なイメージがわきにくいのかもしれない。

表14 10. 年老いた親の扶養

	わからない	親自身や社会保障 に任せる	自分の生活力に 応じて養う	どんなことを しても養う	計
日本	17 (4.5%)	10 (2.7%)	259 (68.9%)	90 (23.9%)	376 (100.0%)
SW	63 (22.9%)	49 (17.8%)	26 (9.5%)	137 (49.8%)	275 (100.0%)
計	80 (12.3%)	59 (9.1%)	285 (43.8%)	227 (34.9%)	651 (100.0%)

これら2問をみると、家族の中の弱者といえる未成年者や老親に対して、日本人よりスウェーデン人のほうが献身的な傾向がある、といえそうだ。老年期観については、一般的イメージと、自分

自身に関する個人的イメージの両方を尋ねた (表15・16)。いずれもスウェーデンのほうが有意に明るいのは、以上のような家族観が関係しているかもしれない。

表15 3. 老年期の一般的イメージ

	暗い	やや暗い	どちらとも いえない	やや明るい	明るい	計
日本	26 (6.9%)	209 (55.6%)	97 (25.8%)	41 (10.9%)	3 (0.8%)	376 (100.0%)
SW	8 (2.8%)	67 (23.6%)	51 (18.0%)	120 (42.3%)	38 (13.4%)	284 (100.0%)
計	34 (5.2%)	276 (41.8%)	148 (22.4%)	161 (24.4%)	41 (6.2%)	660 (100.0%)

表16 4. 老年期の個人的イメージ

	暗い	やや暗い	どちらとも いえない	やや明るい	明るい	計
日本	28 (7.4%)	137 (36.4%)	117 (31.1%)	82 (21.8%)	12 (3.2%)	376 (100.0%)
SW	13 (4.5%)	46 (16.1%)	54 (18.9%)	130 (45.5%)	43 (15.0%)	286 (100.0%)
計	41 (6.2%)	183 (27.6%)	171 (25.8%)	212 (32.0%)	55 (8.3%)	662 (100.0%)

以上のワーク・ライフ・バランスおよび家族観・老年期観については、QOLをはじめとした心理尺度との関係も含めて、今後の個別論文でさらに深く考察する予定である（秋山が主に担当する）。

める比率は、日本の1.6%に対して、スウェーデンは12.4%にのぼる（国連続計）。移民や多文化主義に関して様々な側面から7問を設定したが、全てスウェーデンのほうが有意に肯定的だった（表17～23）。

#### (4) 移民観

2005年において国外からの移住者が全人口に占

表17 13. 移民への寛容（異なる民族的・文化的背景をもつ移住者に対して、あなた自身は寛容であると思えますか（Do you think you have a broad-minded attitude toward immigrants with different ethnic and cultural backgrounds?）

		そう思 わない	あまり そう思 わない	どちらとも いえない	どちらかとい えばそう思 う	そう思 う	計
日本	学生	0 (0.0%)	21 (16.3%)	29 (22.5%)	59 (45.7%)	20 (15.5%)	129 (100.0%)
	教員	3 (1.8%)	22 (13.5%)	43 (26.4%)	73 (44.8%)	22 (13.5%)	163 (100.0%)
	福祉	1 (1.2%)	11 (13.1%)	32 (38.1%)	35 (41.7%)	5 (6.0%)	84 (100.0%)
	計	4 (1.1%)	54 (14.4%)	104 (27.7%)	167 (44.4%)	47 (12.5%)	376 (100.0%)
SW	学生	9 (7.4%)	5 (4.1%)	12 (9.9%)	34 (28.1%)	61 (50.4%)	121 (100.0%)
	教員	4 (3.8%)	5 (4.8%)	3 (2.9%)	30 (28.8%)	62 (59.6%)	104 (100.0%)
	福祉	4 (6.9%)	0 (0.0%)	6 (10.3%)	17 (29.3%)	31 (53.4%)	58 (100.0%)
	計	17 (6.0%)	10 (3.5%)	21 (7.4%)	81 (28.6%)	154 (54.4%)	283 (100.0%)

表18 14. 移民との交流（あなたは、異なる民族的・文化的背景をもつ移住者と積極的に関わりたいと思いますか（Do you want to become associated proactively with immigrants with different ethnic and cultural backgrounds?））

		そう思わない	あまり そう思わない	どちらとも いえない	どちらかとい えばそう思う	そう思う	計
日本	学生	4 (3.1%)	24 (18.6%)	50 (38.8%)	37 (28.7%)	14 (10.9%)	129 (100.0%)
	教員	5 (3.1%)	38 (23.3%)	62 (38.0%)	47 (28.8%)	11 (6.7%)	163 (100.0%)
	福祉	1 (1.2%)	17 (20.2%)	43 (51.2%)	16 (19.0%)	7 (8.3%)	84 (100.0%)
	計	10 (2.7%)	79 (21.0%)	155 (41.2%)	100 (26.6%)	32 (8.5%)	376 (100.0%)
SW	学生	32 (26.7%)	7 (5.8%)	7 (5.8%)	32 (26.7%)	42 (35.0%)	120 (100.0%)
	教員	21 (20.0%)	3 (2.9%)	10 (9.5%)	31 (29.5%)	40 (38.1%)	105 (100.0%)
	福祉	21 (36.2%)	4 (6.9%)	3 (5.2%)	12 (20.7%)	18 (31.0%)	58 (100.0%)
	計	74 (26.1%)	14 (4.9%)	20 (7.1%)	75 (26.5%)	100 (35.3%)	283 (100.0%)

表19 15. 多文化社会を肯定（あなたは自国が、様々な民族的・文化的背景をもつ人々で構成される多文化社会になればいいと思いますか（Do you welcome a multi-cultural society made up of people with various ethnic and cultural backgrounds in Japan/Sweden?））

		そう思わない	あまり そう思わない	どちらともい えない	どちらかとい えばそう思う	そう思う	計
日本	学生	14 (10.9%)	37 (28.7%)	45 (34.9%)	27 (20.9%)	6 (4.7%)	129 (100.0%)
	教員	16 (9.8%)	52 (31.9%)	68 (41.7%)	21 (12.9%)	6 (3.7%)	163 (100.0%)
	福祉	7 (8.3%)	21 (25.0%)	37 (44.0%)	15 (17.9%)	4 (4.8%)	84 (100.0%)
	計	37 (9.8%)	110 (29.3%)	150 (39.9%)	63 (16.8%)	16 (4.3%)	376 (100.0%)
SW	学生	6 (5.0%)	2 (1.7%)	7 (5.8%)	25 (20.7%)	81 (66.9%)	121 (100.0%)
	教員	5 (4.7%)	3 (2.8%)	9 (8.5%)	36 (34.0%)	53 (50.0%)	106 (100.0%)
	福祉	6 (10.2%)	1 (1.7%)	3 (5.1%)	21 (35.6%)	28 (47.5%)	59 (100.0%)
	計	17 (5.9%)	6 (2.1%)	19 (6.6%)	82 (28.7%)	162 (56.6%)	286 (100.0%)

表20 16. 移民の伝統保持（異なる民族的・文化的背景をもつ移住者が固有の習慣・伝統を保持するほうが、自国の社会にとっていいと思いますか（Do you think the preservation of peculiar customs and traditions of immigrants with different ethnic and cultural backgrounds will be beneficial to Japanese/Swedish society?））

		そう思わない	あまり そう思わない	どちらとも いえない	どちらかとい えばそう思う	そう思う	計
日本	学生	4 (3.1%)	15 (11.6%)	52 (40.3%)	49 (38.0%)	9 (7.0%)	129 (100.0%)
	教員	10 (6.1%)	44 (27.0%)	71 (43.6%)	28 (17.2%)	10 (6.1%)	163 (100.0%)
	福祉	6 (7.1%)	16 (19.0%)	40 (47.6%)	17 (20.2%)	5 (6.0%)	84 (100.0%)
	計	20 (5.3%)	75 (19.9%)	163 (43.4%)	94 (25.0%)	24 (6.4%)	376 (100.0%)
SW	学生	15 (12.4%)	13 (10.7%)	14 (11.6%)	36 (29.8%)	43 (35.5%)	121 (100.0%)
	教員	15 (14.2%)	2 (1.9%)	14 (13.2%)	33 (31.1%)	42 (39.6%)	106 (100.0%)
	福祉	10 (17.2%)	2 (3.4%)	6 (10.3%)	18 (31.0%)	22 (37.9%)	58 (100.0%)
	計	40 (14.0%)	17 (6.0%)	34 (11.9%)	87 (30.5%)	107 (37.5%)	285 (100.0%)

表21 17. 移民の増加（あなたの住む町に異なる民族的・文化的背景をもつ移住者が増えることに対し、あなたの意見は次のどちらに近いですか（Which opinion do you belong to on the issue of increasing number of immigrants with different ethnic and cultural backgrounds in your town?）

		賛成	反対	計
日本	学生	80 (62.5%)	48 (37.5%)	128 (100.0%)
	教員	72 (45.0%)	88 (55.0%)	160 (100.0%)
	福祉	40 (48.8%)	42 (51.2%)	82 (100.0%)
	計	192 (51.9%)	178 (48.1%)	370 (100.0%)
SW	学生	81 (72.3%)	31 (27.7%)	112 (100.0%)
	教員	80 (79.2%)	21 (20.8%)	101 (100.0%)
	福祉	38 (66.7%)	19 (33.3%)	57 (100.0%)
	計	199 (73.7%)	71 (26.3%)	270 (100.0%)

表22 18. 移民の生活保障（政府は、異なる民族的・文化的背景をもつ移住者に対し、日本人/スウェーデン人と同様に生活保障をするべきだと思いますか（Do you think the government should provide the same life security as Japanese/Swedish citizens to immigrants with different ethnic and cultural backgrounds?）

		そう思わない	あまり そう思わない	どちらとも いえない	どちらかといえ ばそう思う	そう思う	計
日本	学生	4 (3.1%)	7 (5.4%)	17 (13.2%)	59 (45.7%)	42 (32.6%)	129 (100.0%)
	教員	5 (3.1%)	15 (9.3%)	52 (32.1%)	68 (42.0%)	22 (13.6%)	162 (100.0%)
	福祉	8 (9.5%)	6 (7.1%)	37 (44.0%)	23 (27.4%)	10 (11.9%)	84 (100.0%)
	計	17 (4.5%)	28 (7.5%)	106 (28.3%)	150 (40.0%)	74 (19.7%)	375 (100.0%)
SW	学生	5 (4.1%)	3 (2.5%)	6 (4.9%)	24 (19.7%)	84 (68.9%)	122 (100.0%)
	教員	7 (6.6%)	5 (4.7%)	8 (7.5%)	18 (17.0%)	68 (64.2%)	106 (100.0%)
	福祉	4 (6.8%)	1 (1.7%)	4 (6.8%)	13 (22.0%)	37 (62.7%)	59 (100.0%)
	計	16 (5.6%)	9 (3.1%)	18 (6.3%)	55 (19.2%)	189 (65.9%)	287 (100.0%)

表23 19. 外国人の人権（外国人の人権擁護について、あなたの意見は次のどちらに近いですか（Which of the following opinions yours is the closest to on the protection of human rights for an alien?）

		国籍にかかわらず 同等であるべき	国籍がなければ不 平等でも仕方ない	どちらとも いえない	わからない	計
日本	学生	86 (66.7%)	18 (14.0%)	11 (8.5%)	14 (10.9%)	129 (100.0%)
	教員	107 (65.6%)	30 (18.4%)	21 (12.9%)	5 (3.1%)	163 (100.0%)
	福祉	37 (44.6%)	16 (19.3%)	19 (22.9%)	11 (13.3%)	83 (100.0%)
	計	230 (61.3%)	64 (17.1%)	51 (13.6%)	30 (8.0%)	375 (100.0%)
SW	学生	102 (83.6%)	13 (10.7%)	4 (3.3%)	3 (2.5%)	122 (100.0%)
	教員	90 (84.9%)	6 (5.7%)	7 (6.6%)	3 (2.8%)	106 (100.0%)
	福祉	49 (83.1%)	2 (3.4%)	6 (10.2%)	2 (3.4%)	59 (100.0%)
	計	241 (84.0%)	21 (7.3%)	17 (5.9%)	8 (2.8%)	287 (100.0%)

移民観と他の心理尺度などとの関連については今後の個別論文で詳細に考察するため（森が主に担当する）、本稿では単純集計の紹介にとどめる。

## 引用文献

- 電通総研日本リサーチセンター編 2008 『世界主要国価値観データブック』, 同友館
- Diener, E., & Diener, M. 1995 Cross-cultural correlates of life satisfaction and self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 68, 653-63
- Fukuyama, F. 1995 “TRUST”, =1996 (加藤寛訳) 『「信」無くば立たず』, 三笠書房
- 石井研士 1997 『データブック 現代日本人の宗教』, 新曜社
- 河合隼雄 1997 『アニミズムと倫理』, 河合隼雄・鶴見駿輔共編『現代日本文化論9 倫理と道德』, 岩波書店
- 河地和子 2003 『自信力はどう育つか』, 朝日新聞社
- キサラ, R・永井美紀子・山田真茂留編 2007 『信頼社会のゆくえ』, ハーベスト社
- Markus, H. R., & Kitayama, S. 1991 Culture and the self: Implications for cognition, emotion and motivation, *Psychological Review*, 98, 224-53
- 大岡頼光 2004 『なぜ老人を介護するのか～スウェーデンと日本の家と死生観～』, 勁草書房
- Oyserman, D. Ol, & Coon, H. J., & Kimmelmeier, M. 2002 Rethinking individualism and collectivism: Evaluation of theoretical assumptions and meta-analysis, *Psychological Bulletin*, 128, 3-72
- 高田利武 2004 『日本人らしさ』の発達社会心理学～自己・社会的比較・文化～』, ナカニシヤ出版
- 武田龍夫 1995 『北欧～その素顔との対話～』, 中央公論社
- Telhaug, A. O., & Mediås, O. A., & Aasen, P. 2004 From Collectivism to Individualism? Education as Nation Building in a Scandinavian Perspective, *Scandinavian Journal of Educa-*

*tional Research*, 48-2, 141-58

山岸敏男 2008 『日本の「安心」はなぜ、消えたのか～社会心理学から見た現代日本の問題点～』, 集英社インターナショナル

## 注

- 1) 大学生は、ストックホルム近郊にあるErsta Sköndal大の福祉系学部と、Gävle市にあるGävle大の経済系学部の2つからほぼ半数ずつ。前者は女性が圧倒的に多く、年齢構成がかなり幅広くなった。教員は、Nacka高校の教員の協力を得て、労働組合の会合等で配布・回収していただいた。福祉は、ファミリー・カウンセリング1、障害者団体1、高齢者施設3の計5施設。協力していただいたコーディネーターの高橋たか子氏ほかに深く感謝する。
- 2) 教員の種別は設問に組み込まなかった。学歴から判断すると、日本では中高と小学校に加え、幼稚園教諭も少数含まれるようだ。スウェーデンでは注1に述べた調査方法から推測して、高校教員がほとんどではないだろうか。
- 3) 以下にあげる調査からの数字は全て少数2桁で繰り上げた。また無回答は集計から除外したため、設問によって総数が異なっている。また表中等でスウェーデンをSWと略記することができる。
- 4) 特に今回対象としたErsta Sköndal大は福祉系の学部だったためか、平均年齢が30.6才と高かった。
- 5) 2009年の世界ランキングではスウェーデン14位・日本17位 (IMF『World Economic Outlook』2010年10月版)。
- 6) 他の2つは、「身体」領域の「体の痛みや不快感のせいで、しなければならぬことがどのくらい制限されていますか」「家の周囲を出まわることがよくありますか」である。
- 7) この調査は6問版を使用しており、選択肢の段階や集計法も異なるため、数値はあげない。
- 8)他に日本青少年研究所による近年の一連の調査など。
- 9) これに対し、地理的・歴史的にもっとも近い

ノルウェーは高い宗教性を示す（石井 [1997 : 129]）。